

## 第6回 子どもの命と権利を守る活動推進協議会シンポジウム ネット社会にひそむ闇から子どもを守るために

～あなたは子どもの声が聞こえていますか～

2018年2月19日、くまもと県民交流館パレア（熊本市中央区）で、子どもの命と権利を守る活動推進協議会シンポジウムが行われました。会場には、教育関係者や保護者など約●人が集まり、皆熱心に耳を傾けていました。以下、シンポジウム要旨要約。

シンポジウムの開会に先立ち、子どもの命と権利を守る活動推進協議会会長 谷口功氏が「ネット社会は便利な反面、使い方一つで非常に危険な道具、手段にもなってしまう。大人がしっかりとした認識を持ち、子どもたちが不利益を受けないよう、またいろんなことに巻き込まれないよう考えていく必要がある」と挨拶。「熊本から一人の子どもの犠牲者も出さないという強い決意の下、一緒に考え、課題を見つけ、今ある現状を認識して対応策を考えていきたい」と締めくくりました。

次に、熊本県副知事小野泰輔氏が「近年の技術進歩により子どもたちが被害に遭うリスクが高まっている。私たち一人一人が、一見あまり関係ないと思えることにも、みんなで知恵を出しながら、子どもたちを危険から守ろうという意識を高めていかななくてはならない」と挨拶。県と教育委員会そして警察本部が連携し、子どもたちが安心して暮らせる熊本を作っていきたいと決意を新たにしていました。

そして最後に、熊本県警察本部の村田達哉本部長が挨拶。「スマートフォンなどのSNSを始め、ネット利用が子どもに急速に拡大するという問題に直面し、インターネットが厳しい現実社会とつながっているということへの認識が、子どもだけでなく保護者にも浸透していない。インターネットを通じ児童買春や児童ポルノといった性関係の被害に遭う少年の数が、全国的にもそして残念ながら熊本でも右肩上がりに増加している」と強調しました。ネットを使ったいじめ、ネット依存、あるいは子ども自身が他人のプライバシーの権利を侵害するなど、加害者にもなり得ることへの警鐘を鳴らしました。

青少年が初めてスマートフォンを手にする新入学の時季、改正されたフィルタリングの利用促進とともに、ネットにひそむ闇を保護者、子ども共に認識し、各家庭への啓発活動を展開していく必要性を訴えました。

### ■第一部 「座間事件から見えてくるもの」 テレビ熊本報道部記者 有田和令氏

昨年10月末、神奈川県座間市のアパートで男女9人の切断された遺体が見つかった「座間事件」。容疑者・白石隆浩（27歳）により殺害された被害者は、東京、埼玉、神奈川、群馬、福島に住む15歳から26歳の男女9人。容疑者と被害者の接点となったのが、LINEやツイッター、フェイスブック、インスタグラムといったSNS。ツイッターの「裏アカ」を利用した巧みな問いかけで自殺志願者となつたり、殺人事件に発展した最悪の事件とな

りました。

フジテレビでの研修中にこの事件の取材を経験した有田記者は、「自分たちメディアも、容疑者がどのようにして被害者と知り合ったのかを調べるには、ネットに頼るしかなかった。容疑者がツイッターの複数のアカウントを使っていたということもあり、インターネットを使って画像を探したり、知人を探したり。現場にいてもこの情報が正しいのか誤っているのか分からないことに取材の難しさを感じた」と振り返りました。

そのような中で、「取材する記者としては『直接会って真偽を確認する』ことの大切さ、自分が確認をした情報を使うというルールを徹底することの重要性を学んだ」といいます。

熊本でも、いつ同様の事件が起きてもおかしくありません。2014年5月、人吉市の女子高生が、SNS上でやりとりをした容疑者に山中で殺害された事件。県北の駅で、女子生徒が男二人にGPS機能を使い場所を特定され、車に連れ込まれて暴行された事件など、熊本でもすでにSNSを使った事件が起きています。

「私たち報道機関は事件が起きた後、その背景、動機、目的、被害者情報などを掘り下げるのが常ですが、日頃からこのような問題が起きずにするためのアプローチをする必要があると感じています」と、報道機関のあるべき姿、役割について語りました。

## ■第二部 ワークショップ

「ネット社会に生きる子どもたちから大人への宿題」～相談される大人になるには～  
熊本市立三和中学校生徒指導主事 田中慎一朗氏

今回は、SNSを使うことによるさまざまなリスクを例に挙げ、会場の参加と一緒にネット社会が投げ掛ける問題について考えるワークが行われました。

### <ワークショップでの会場の声>

Q 「SNSを使って感じることは？」

参加者 「フェイスブックやSNSは、自分の日記、思い出として振り返れるようにアップしているので、それが周りからどう見られているかということまで意識はない」

Q 「ネットの使いづらさ、やりづらさを感じたことは？」

参加者 「皆に読んでもらいたいという気持ちより、メモ代わりや、後で読み返そうと思って上げた情報に、コメントが入るとそれに返すのが面倒」

### <子どもたちがSNSを使って感じる不安を紹介>

子ども 「自分は仲がいいと思っているはずの子の裏アカ（裏アカウント）を発見して、その子からフォローされていなかったら、何か裏があるんじゃないかと思ってしまう」

↓

<大人たちが知らない子どもの世界をのぞいてみよう、昨年10月から今年1月にかけて、

多くの学校でアンケートを実施>

・家でLINEをする理由 →「友達との会話ができるから」

大人は用件があるからLINEをするけれど、子どもたちは「話しているうちに目的ができる」

・ネットでの告白や謝罪はあり？ →24%の保護者が「あり」、子どもは半分が「あり」

・「ウソ告」はあり？ →「だって好きな人がいて告白してふられたときの保険なんです」

Q 「LINEで既読を付けたらどのくらいの早さで返信をしますか？」

子どもたちは、1分以内で返信するというのが断トツ。しかし本音は、「面倒くさい」。

Q 「SNSと言われる四つの違いは？」

子ども→ ◆LINE…友達と会話。電話。

◆ツイッター…自分の思ったことをポロッとつぶやける場。流行の最先端。

膨大な情報源。

◆インスタグラム…日常のこと、自己満足

◆フェイスブック…個人情報ばれやすい。大人の世界。世界中とつながることができる

<LINEで相談に乗った事例を紹介>

LINE 「そろそろ学校に行かなかったら、さぼりと呼ばれるかもしれない」「真面目に先生心配しとらすよと」「あなただけが友達だ」

裏アカ 「どうせ口だけ」「キモい」「私そうですか」「おまえのせいで最悪やわ」

\*書かれた生徒は「人に親切にすることが怖くなった」

Q 「僕たち（子どもたち）の世界はどんどん変わっていくけれど、大人たちは変わらない。でも、どうやったら僕たちの被害を防いでくれるんですか」

参加者 「道徳的なものを、親子でちゃんとコミュニケーションを取って、人間としての生き方や心というのを作っていくのが、一番大事ではないかと思いました」

↓

<別のワークショップで大人が出した答え>

「被害を防ぐには自衛が必要」「子どもたちに自衛をしろ」「疑似体験で失敗をさせろ」「表現、想像力を養わせろ」

↓

<これを聞いた子どもたちの答え>

「大人と子どもが同じようにネットを理解して、お互いの話をちゃんと聞いた方がいいよ」  
「変わる子どもの世界に大人は寄り添って」「私たちだって迷っているの」「もっと興味を持って」「なぜ僕らがツイッターをするのかというのを、もっと研究してくれ」「親はもっとそれにはまる理由を考えてくれ」

### ■第三部 パネルトーク

コーディネーター 吉村郁也氏（子どもの命と権利を守る活動推進協議会会長）

パネリスト 有田和令氏（テレビ熊本報道部記者）

田中慎一朗氏（熊本市立三和中学校教諭）

岩下憲一郎氏（熊本県警察本部少年課、少年サポートセンター係長）

〈以下、抜粋〉

— 中学校で試行的に LINE の相談窓口を作っておられますね。

田中 職員室に相談に行くと、「あいつチクった」となり、LINE のグループトークで外しにあった子がいました。そのグループトークの中の一人の子が私に、「これはちょっと危ない」と、トークの内容を撮って私の個人 ID に送ってきたのです。しかし個人の ID ではなく、公的な受付ができるシステムをつくらうと思えば LINE の相談窓口を作ったのです。ただ、実際の相談は LINE ではなく、面と向かって行きます。彼らは、「知らない誰かに相談をしたい」という一方で、「知っている誰かに相談をしたい」という気持ちも持っているのです。

— 「ネット社会の闇」「ネット社会の影」という言葉を聞きますが、現状は。

岩下 コミュニティー等に起因する事犯の被害少年数は右肩上がり。被害数は増加し続け、平成 28 年が過去最多だったのですが、それを上回るペースで被害が発生しています。罪種別には、児童買春に児童ポルノの被害、強姦、略取・誘拐、強制わいせつというような被害も発生しています。18 歳未満の少年を主に、性的な犯罪が多く発生。被害少年のほとんどがスマートフォンでこのようなサイトを利用しています。また、その 9 割以上がフィルタリング（有害情報を閲覧できないようにするソフト）を利用していなかったという統計も出ています。

— 児童ポルノは、全国的に見ると、ここ 10 年で件数が 3.1 倍。被害児童者数は 3.58 倍に。少年事件の件数自体は減っているのに、この分野だけは急激に増えている。それは、やはり、ネット・スマホ社会の影の部分だろうと思うのです。ここから子どもたちを救う方法が、「法律の整備」「フィルタリング」「教育と啓発」です。私はメディアの果たす役割は非常に大きいと思います。

有田 メディアとしては、事件発生を報道するというのも役割の一つですが、それに加え、それらの事件を未然に防ぐ取り組みをやっていかなければならないと感じています。

— サイバー補導とは。

岩下 インターネット、特に SNS のパトロールをしていると、子どもたちがインターネットに不適切な投稿をしていることがあります。その子どもさんと交信、直接会って、指導、補導したうえでいろんな話を聞き、保護者に引き渡すという活動です。毎年少なくとも 10 人以上が補導されます。高校生が中心ですが、一部中学生も含まれています。

— 子どもは宝。次世代を担うのは子どもなのです。SNS やインターネットは子どもたちにとって本当に便利なツール。それをいかに安全で賢く使えるようにするかをぜひ、家庭でも話合ってみてください。